

令和4年度

上勝中学校 「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- わかる授業・活躍の場がある授業の創造
- 家庭学習の習慣化
- 徳島県GIGAスクール構想の推進

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員	委員
濱 文和	校長 倉橋 誠一 教頭 山田 孝志 教務主任 春木 幸恵 1年主任 吉岡 璃緒 2年主任 福良 毅 3年主任 築地 靖幸

校長

倉橋 誠一

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○全般的に素直で前向きで、何事にも真面目に取り組むことができる。 ●実力テストなどの出題範囲が広いテストでは、定期テストと比べ正答率が下がる。	・授業に真面目に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能を習得することができる。 ・知識・技能の定着を図るため、家庭学習及びテスト前の学習に計画的に取り組むことができる。	・定期テストを廃止して単元末ごとにテストを行い、短期間で確認をしていくことで、知識・技能の定着を図る。また、テストごとに目標点を設定し、未達者は補充学習を行う。(目標点達成率80%以上) ・実力テスト前に部活動休止期間を設定し、計画的に学習に取り組む環境を作る。	アンケートにより単元末テストの頻度が多いことや、提出物の量が多いなどが生徒の負担になっていたことが判明した。そこで週あたりの回数を3回に制限し、自主学習の内容を各教科の提出物で代用可にするなど負担軽減を図った。	年度末の単元末テストに対するアンケート結果では、生徒・保護者ともに肯定的な意見が多く見られた。特に中間アンケートと比較しても、「学習に前向きに取り組めるようになった」や「学力が身につけてきた」の項目が向上し、手応えを感じている生徒も多く見られた。	達成状況で記述したとおり、多くの生徒は手応えを感じ、意欲的に取り組むことができていたが、目標点未達の生徒が固定化されており、モチベーションの低下が見られた。すべての生徒が学力が身につけてきたことを実感できるように、フォローしていく施策が必要である。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○授業中に進んで発表し、課題に意欲的に取り組むことができる。 ○生徒数が少ないため、学校生活の中で一人一人が活躍する場面が多い。 ●思考力や長文での記述を必要とする問題では、他の問題と比べ正答率が下がる。	・自分の考えを、根拠や理由を明確にしながらか説明したり、書いたりして伝えることができる。 ・各授業における課題に対する話し合い活動を通して、解決する方法を考えることができる。	・毎日テーマを決めて、自分の考えや意見を生活記録に書かせ(3文以上)、コメントを書いて返す。 ・終学活で1分間スピーチを実施する。 ・生徒の発言や発表の内容に応じ、「なぜ」、「どうして」などの更なる発問を行い、生徒の考えを深めさせる。	生徒の思考力・表現力を養うため、各教科の授業の中で、生徒が自ら考えたことを発表したりする場面を多く取り入れる。生活記録や1分間スピーチは継続して実施する。	・生活記録については毎日きちんと提出できる生徒も多くいたが、全ての生徒が毎日提出することはできなかった。スピーチについても生徒により、1分より短くなることがあった。 ・思考力・表現力がついてきているように感じる場面もあるが、発表となると消極的になる生徒が多いように感じた。	学校生活の中で、多くの生徒が発表できるような場面を設定する。各授業では授業計画の更なる改善を進め、生徒の思考力・判断力・表現力の向上につとめる。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ノーチャーム着席、朝の自習、エクストラスタディーズなど、基本的な学習規律を守って主体的に学習に取り組むことができる。 ●課題を期限内に提出することができていない生徒もいる。	・各教科の学習に主体的に取り組むことができる。 ・自分の学習の状況をしっかりと振り返り、自らの課題を解決できるよう計画を立て、実践することができる。	・タブレットのドリル教材を活用し、生徒自ら学ぼうとする姿勢をつけさせる。 ・「何を」「どのように学ぶのか」が生徒に伝わるよう、「授業のめあて」「学習の流れ」を提示する。 ・学習サイクルを確立するように、単元末テストに向けた家庭学習を行うように支援する。(提出物の提出率90%以上)	ICT活用は個人差が大きく、全員の教員が授業で使えるよう研修等を積極的に行っていく。	・本年度より教員にも1人1台のタブレットが配布され各授業にて更なる活用が行われるようになった。 ・校内研修を複数回実施し、教員全員のICT活用能力の向上を図った。	教科により、タブレットの活用場面に差があることもあり、教員によってタブレットの活用には大きな差が見られた。生徒の学力の向上のために、必要な場面でタブレットが使えるように、引き続き教員の更なるスキル向上を図る。

令和4年度 学力向上ロードマップ

